

# 日本語における感情性の機能・ 意味的な場について

外国語学部 日本語学科 須田 義治

## On the functional-semantic field of emotionality in Japanese

Yoshiharu SUDA

### 1. はじめに

言語において、多様な表現手段によって表される、人のさまざまな感情の意味領域（機能・意味的な場<sup>1</sup>）を感情性と呼ぶ。感情とは、喜びや悲しみや怒りなどのように、主体の性格や欲求や関心と、外的な状況との、認識を媒介とした相互作用によって、その主体に生じてくる心理的な状態である。

現実の感情同様、言語において表される感情も、単純なものではない。形容詞「うれしい」のように感情そのものを名づける単語もあるが、文の対象的な内容にともなう感情的な色づけもある。また、感情だけが純粹に表されている場合もあるが、多くの場合、感情的な意味が、評価的な意味や強調的な意味とからみあって表され、きりはなすことが難しい。したがって、言語における感情性の調査では、まず第一に、そうした、多様な表現手段と意味を整理して、体系的にまとめることが課題となる。

文において、感情的な意味は、語彙的な手段、語構成的な手段、形態論的な手段、構文論的な手段、コンテクスト的な手段など、さまざまな言語的な手段によって表現される。したがって、それぞれの感情的な意味が、おもに、どの表現手段によって表されているかで、感情性を整理することができるわけだが、一つの感情的な意味が、つねに、一つの表現手段だけによって表現されているわけではない。そのため、本稿における表現手段の面からの整理は明解さを欠くところがあり、意

<sup>1</sup> 機能・意味的な場とは、一つの意味論的なカテゴリーにまとめられる多様な意味と、それらを表す多様な表現手段（語彙的な、語構成的な、形態論的な、構文論的な、コンテクスト的な表現手段）との統一体である。（須田（2010）参照）

味的な面からの分類がなされていないこととも相まって、以下の記述には、分かりにくさがつきまとうかもしれない。

本稿で対象とする感情性は、おもに、会話における話し手の感情であるが、それは、話し手の、文の对象的な内容に対する関係（態度）の一つと言えるので、陳述性、とくにモダリティに属するものと考えられる。その下位の、それも周辺的な（副次的な）意味領域と言えるだろう。周辺的というのは、感情的な意味を表すための、文法化された特定の表現手段（形態論的なカテゴリーなど）がないことによる。しかし、それでも、もっぱら感情的な意味を表すという表現手段は存在するので、感情性という意味領域を一つのまとまりとしてとりだす必要はあると考えられる。

## 2. 語彙的な手段

### 2-1. 感情をさししめす単語

感情をさししめす形容詞は、非過去形で、一人称の文の述語に使われれば、発話時における、単語のさしだす話し手の感情を直接的に表すことがある。また、感情をさししめす動詞も、一人称の文で、話し手の感情を表すことがある。

1) 「あ、見て見て、戸田君と西脇君だ。きゃー、手振ってくれた、嬉しい」

美和子がはしゃいで手を振った。(恩田陸・夜のピクニック)

2) イワさんはちょっと顎を引いて鞆子を見つめなおした。「そうですね。思い出しましたよ。

いや、驚いた」(宮部みゆき・淋しい狩人)

### 2-2. 単語の意味特徴の一つとしての感情

「ほざく、やらかす」「イカサマ野郎」のように、動詞や名詞の中には、その語彙的な意味の意味特徴の一つとして感情的な意味を表すものがある。「ほざく」は「言う」と、さししめす現実の動作自体は同じであるが、それに対する話し手の感情的な態度が異なっているのである。そのため、これは単語の文体的な特徴ともされる。

宮島(1994)は、「ひんまげる」「つんのめる」といった俗語が乱暴さ軽率さなどのニュアンスをとまうと述べたあと、「くたばる」「嘘つきやがれ」などの例をあげながら、次のように述べている。

「くたばる」「嘘つきやがれ」なども「俗語的であり、それに応ずる意味的な特徴をもっている。しかし、その特徴というのは、上の〈乱暴さ〉など、動作自身のもっている客観的な属性より、話し手がこの動作に対していただいている、軽べつ・にくしみなどの感情だ。死ぬこと、うそをつくこと自体が、あらあらしかったり、みにくかったりする、というよりも、話し手の主体的な感情を直接に表現しているのである。「ひんまげる」「つんのめる」なども、時としては、動作主体に対する

感情の表現となることがある。しかし、その際、これらの動詞は、直接的には動作のあらあらしさ、みにくさをあらわしているのであり、そういうものとして動作をえがきだすことによって、間接的に動作主体への感情をこめているのだ。」(p.267、下線筆者)

また、動作の様態をさししめす副詞は、「ろくすっぽ、とつと、ズケズケと、ゴタゴタ」のように、その意味特徴の一つとして、感情的な意味を含むものがある。動作のし手でなく、話し手の感情的な態度を表しているのである。

### 3. 語構成的な手段

「ど素人、クソ太鼓」「クソ忙しい」「ぶっ建てる、ぶち壊す」「冷血漢め(馬鹿者め、馬鹿め、あいつめ)、馬鹿たれ」など、接辞(接頭辞と接尾辞)の付加という単語の形式によって感情的な意味が表されているものもある(この場合は、ほとんど否定的な感情のようである)。もとになる単語のさししめすものに対する話し手の感情的な態度を表しており、広い意味においては語彙的な意味の一要素と考えられるが、これは、語構成的に表現された感情的な意味である。

「すごく→すつごく、どこも→どっこも」(促音)、「あら→あらー、ぜったい→ぜええったい」(長音)のように、発音上の変化が話し手の感情を表すことがある。これらは基本的には強調的な意味を表し、感情的な意味は、それにともなうものと考えられる。これは単語の形式の音声的なバリエーションであり、やはり、語彙的なもののなかに入るとも言える。

### 4. 形態論的な手段

#### 4-1. 形態論的なカテゴリー

##### 4-1-1. アスペクト、テンス

アスペクトの形態論的な形の一つである動詞の完成相の非過去形が、感情的な意味を表すことがある。この場合、「よく」など、評価的な意味を表す形容詞や副詞をともなうことが多い<sup>2</sup>。

これは、形態論的な形の表す文法的な意味の一つに含まれる意味特徴と言える。だが、意味特徴と認められるのは、評価的な意味であって、感情的な意味は、文におけるその使用にともなう色づけと見ることもできるかもしれない。とすれば、これは、構文論的な手段、あるいはコンテクスト的な手段に近いものということになる。想定外・理解を越えていることを表すもの(例3.4)、感嘆・

<sup>2</sup> 完成相非過去形以外でも、次の例のように、「よく」をともなって感情的な意味を表す場合がある。また、「よくもまあ」という形も使われる。

「新聞広告を出したわけじゃないのに、よくこれだけ集まったわねえ」伊佐子が感心している。(宮部みゆき・勝ち逃げ)

「よくもまあ、律儀に講義を受けて、嫌にならないな」と周囲の友人たちに呆れられるのにも慣れた。(伊坂幸太郎・砂漠)

肯定的な評価を表すもの（例5,6）、皮肉・あきれを表すもの（例7,8）などがある。

3) 「それにしても、よく降るね」（宮部みゆき・淋しい狩人）

4) ズバズバ言うなあ。やっぱアメリカ人だ。貴子は苦笑する。（恩田陸・夜のピクニック）

5) 「山田君、やるね」女の子が大笑いをしながら指を差す。隣のレーンで、泥酔のあまり足をこんがらからせて投球する山田が、ストライクを取ったのだ。（伊坂幸太郎・砂漠）

6) 「才能のある人間ほど虐げられる」

「うまいことを言う」僕はその、家裁調査官に感心する。（伊坂幸太郎・砂漠）

7) 一度だけ、鷺尾氏から留守番電話に、「麻生君に見破られるかもしれないが、君たちの情報をもとにしてやってみるよ」という旨のメッセージが入っていた。「よく言うね」それを聞いた鳩麦さんは、僕の隣で、塩辛いものでも食べたような顔をした。（伊坂幸太郎・砂漠）

8) 「あの子の写真を回覧してるみたいだ。よくやるよ。女子から情報収集するつもりらしい」（恩田陸・夜のピクニック）

「すればいい」「するのだ」などのモダリティの表現手段が、過去形において、後悔など、話し手の感情的な態度を表す場合もある。

9) 「損した。青春しとけばよかった」（恩田陸・夜のピクニック）

10) 「——もっと、ちゃんと高校生やっつくんだったな」（恩田陸・夜のピクニック）

#### 4-1-2. ヴォイス

いわゆる〈めいわくのうけみ〉は、主語のさしだす人にとって「めいわく」な事態を表すのだが、主語が話し手になると、その「めいわく」にともなう感情的な色づけがいくらか強く出てくるようである。

11) 勝手に、あちこちに「鞠子は俺の女だ」と言い触らされたこともあります。（宮部みゆき・淋しい狩人）

#### 4-2. 形態論的なカテゴリー以外の形

「してしまう」「しやがる」のように、形態論的なカテゴリー以外の文法化した形にも、動詞のさししめす動作に対する話し手の感情的な態度を表すものがある。「してやる」も、「殺してやる」のように、感情的な意味を表すことがあるが、動作が話し手の動作のとき、その動作の対象となる人に対する話し手の感情的な態度を表すという点で異なる。

「のに」や「くせに」のような逆接の後置接続詞は、もともと、感情的な意味や色づけをともなう（ことが多い）ものだが、文末に使われる終止的な用法においては、それが、より強まるようであ

る。

12) まあ、チャイムを鳴らしてくれたらいいのに。(有川浩・三匹のおっさん)

#### 4-3. 単語の形態論的な形が固定化したもの

「覚えてろ」「いい加減にしろ」「嘘つけ」「ざまあみろ」「なめるな(よ)」などは、命令形が固定化し、ののしりなどを表す一つの単語(感動詞)に移行したものである。しかし、これは、感動詞に移行しているとしても、もとの語彙的な意味を残しているので、語彙的な手段に近いものと言えるだろう。

また、「やった」「やられた」「冗談じゃない」「ふざけんじゃねえ」「信じらんねえ」などは、過去形やうけみ形や否定形などが固定化したものである。

### 5. 構文論的な手段

#### 5-1. 名詞述語文

形容詞とくみあわさった名詞述語は、山田孝雄の言う「換体句」(「妙なる笛の音よ」)のように、感情的な意味を表す<sup>3</sup>。これは、文の対象的な内容に対する話し手の関係(態度)、すなわち、文の陳述的な意味の構文論的な表現であるが、この種の文を、現代日本語において、感嘆文という文の意味的なタイプの一つとすることができるかどうかは、くわしい検討が必要である。

この種の文に使われるのは、基本的に評価を表す形容詞であるが、それ自体に感情的な意味を強く含むものと、それほど含まないものがある。いずれにしても、文のレベルで感情的な意味が表されていると考えられるのだが、「まったく」「実に」などの副詞をとる場合は、感情的な意味がより明確になる(例 14,15)。

また、文の構文論的な構造としては、基本的に、主語のない一語文となる<sup>4</sup>。述語の形は、ふつう現在形だが、「だ」などのむすびをとまわらないものもある(例 13)。これは、少し文体的に古いもののようにも思われるが、感情的な意味がより強いものと言えるかもしれない。

13) あらまあまあ、大きな花束! (有川浩・三匹のおっさん)

14) まったく、救いようのない男です。(宮部みゆき・混線)

<sup>3</sup> 日本語記述文法研究会編(2003)では、この種の文について、「感嘆のモダリティ」を担う「感嘆文」とされている。そこでは、「この作品のおもしろいこと!」のような文など、さまざまな文がとりあげられている(pp.82-89)。このように、「こと」や「もの」などの形式名詞を使った文法化した形もあるが、ここでは触れない(「もの」については、須田(2009)参照)。

<sup>4</sup> それほど多くはないが、主語がある文もある。

「それにしても、西ちゃんたちは不思議な学生だよな」僕の上家に座る古賀氏がしみじみと言った。(伊坂幸太郎・砂漠)

15) 実にいい考えだ。(宮部みゆき・ムクロバラ)

この種の文は、次のように、「な」や「ね」の終助辞をともなうことも多い。感情的な意味がより強いのは、「な(あ)」がつくものようである(例16,17)。

16) 「全くひどい雷ですなあ」(林芙美子・山中歌合)

17) うわあ。長い列だなあ、やっぱり。

貴子は遠くを行く光の列に見とれながら、何気なく視線を動かした。(恩田陸・夜のピクニック)

18) 「いい心がけだねえ」(宮部みゆき・淋しい狩人)

19) うーん、と東堂の母親は困惑まじりの笑みを見せ、不思議な強さねえ、と名人は名人を知るの趣で、感心した。(伊坂幸太郎・砂漠)

形容詞をともなわない名詞述語文も、同様の意味を表すことがある。意味的に評価性や程度性を表す名詞が多い。

20) 春だねえ……(宮部みゆき・淋しい狩人)

21) 「心配性だなあ」と政彦は笑って、お茶を啜った。(重松清・ビタミンF)

22) 「酔ヶ湯までどの位ですか?」

「さア、四里はあるでしょう……」

「本当に山の中だなあ」と兄がいった。(林芙美子・山中歌合)

## 5-2. 感動詞<sup>5</sup>

次のような感動詞による感情の表現は、話し手の感情をそのまま表していると言え、直接的である。感情を表す感動詞であれば、これは語彙的な手段とも考えられるが、それ自体で一つの文を構成したり、文の構文論的な構造に入りこんだりして、文の文法的な意味の表現に関わるものなので、ここでは、構文論的な手段としておく。ここにあげた感動詞が、さけびのようなものであれば、現実の断片を名づけるという語彙的な意味の性格も弱いと言えるだろう。次の例にあげる感動詞は「感慨」を表すものだが、ほかに、「あちゃちゃちゃ」(困惑)、「ひえー」(恐れ)、「わあ」(驚き)、「ふん」「こら」(怒り)、「くそー」「畜生」(ののしり)などがある<sup>6</sup>。

<sup>5</sup> 感動詞については、村木(2012)にくわしい分析がある。

<sup>6</sup> 「馬鹿野郎、お生憎さま」「やだあ、ばかばかしい、うるさい」「あんたなあ!」なども感動詞と言えるかもしれないが、ここにあげたものとは少し違って、形容詞や名詞など、他の品詞から移行してきたものであり、もとの語彙的な意味がより残っているものである。そのため、感情的な意味を表す形容詞などの語彙的な手段に近いものと言えるだろう。

- 23) 店の入り口に掲げたこの額縁に、こんなふう明るく陽があたっているのを見ると、イワさんはいつも、(ああ、春が来たなあ)と実感する。(宮部みゆき・淋しい狩人)
- 24) メインディッシュの牛フィレステーキの皿を下げてもらおうと、やれやれ、と一仕事終了たような気分になった。(重松清・ビタミンF)

### 5-3. 陳述詞

主要な品詞(名詞、動詞、形容詞、副詞)は、現実の断片をさしめず名づける意味を持つが、周辺の品詞(接続詞、感動詞、陳述副詞など)は、そのような名づける意味を持たない。陳述副詞を、以下では、村木(2012)などになって陳述詞と呼ぶことにするが、陳述詞と感動詞との違いを村木は次のように述べている。

「まさか」や「べつに」のような陳述詞の本来の機能は、文のあらわすことがらのくみたてにかかわらないで、述語と共同して、文の述べ方をあらわす成分である。言語主体(話し手)の事態に対する認識・判断や、話し手と聞き手を取りむすぶ伝達にかかわるさまざまな関係をあらわすものであるという点では、陳述詞と感動詞に共通した性質がある。陳述詞は、述語といっしょになって、文の述べ方をあらわすのに対して、感動詞は、それ自体、文に相当し、話し手による事態へのかかわりや、話し手と聞き手とのさまざまなかかわりをあらわす。」(村木(2012)、p.347)

たとえば、陳述詞「いったい」は、次のように、疑問詞とともに、話し手の疑念・疑問や不可解といった感情的な意味を表す。「いったい何がどうしたのだ」「いったいどこのだいつだ」のように、疑問詞を重ねて感情的な意味を強めた表現もある。

- 25) いったいどうなってるんだ、末松！(萩原浩・神様からひと言)
- 26) いったいぜんたいどこへ消えちまったんだらうね。(萩原浩・神様からひと言)

また、以下にあげる陳述詞は、評価的な意味や強調的な意味とともに、話し手のさまざまな感情的な態度を表している。

- 27) 「どうせ俺は18分台だよ」

とキングが拗ねる。(三浦しおん・風が強く吹いている)

- 28) さすがが体育大学はちがうなあと、感心しながら受付をすませ、ゼッケンをもらう。(三浦しおん・風が強く吹いている)

- 29) 「もう嫌、あの人」南が声を押し殺しながらも、悲鳴まじりに、長谷川さんを罵る。(伊坂幸太郎・砂漠)

- 30) あんな、古い、ぼろい、いかれた、ガラクタの、ボンコツの、くだらない、馬鹿な、いまましい、ケチな飛行機に、よくも人を乗せたな！きさまのようなへぼパイロットは自転車かスーパーマーケットのカートにでも乗ってればいいんだ！まったく金を取ってこんな目にあ

わせるとは！(池澤夏樹・南の島のティオ)

31) よりによって初っぱなからこんなトラブルに巻きこまれるなんて。(荻原浩・神様からひと言)

#### 5-4. 「なんて」「なんと」

##### 5-4-1. 規定語的な用法

次の例は、「なんて(なんという)」が、文のなかで名詞のまえにおかれ、評価的な意味とともに、感情的な意味を表している。これは、文の中で規定語として働いているので、陳述詞とは言いがたいが、このようなものも陳述詞に含める必要があるかもしれない。

32) 「謝りなさい！お父さんに、なんてこと言うの！」

キン、ととがった声が、部屋の時間を止めた。(重松清・ビタミンF)

33) 「信じられない」

「なんて奴」

「どんでん返しね」

融と亮子の背中を見ながら、三人は呪詛の声を上げた。(恩田陸・夜のピクニック)

##### 5-4-2. 修飾語的な用法

「なんて」「なんと」が、形容詞や副詞のまえにおかれ、感情的な意味を表している場合もある。形容詞や副詞の表す意味を感情的に強調する陳述詞と言えるだろう。これは、「だろう(であろう)」がつく推量の形をとることがある(例35)。

34) なんて無関心な家なんだ！と、わたしは受話器を叩きつけた。(宮部みゆき・さよなら、キリハラさん)

35) 「浮世には思い出もあらず」何とすがすがしく云い放ったものであろう。(林芙美子・魚の序文)

##### 5-4-3. 独立語的な用法

「なんと」が、文のなかで形容詞や副詞を修飾するのではなく、文全体にかかって、話し手の感情的な態度(おもに驚き)を表すものがある(「なんて」には、このような用法がない)。話し手の感情の直接的な吐露というより、聞き手に対して、感情をこめて文の対象的な内容を説明しているようである。これは、「なんと驚いたことに」という形で使われることから、評価成分に近いものと言えるだろう。

36) 学校の給食の時にね、前日のテレビでスプーン曲げをやっていたものだから、みんなで試

したんだ。何と私だけが曲げられてね。(伊坂幸太郎・砂漠)

37) 少年は満足そうに頷いた。

「榊杏奈の弟だよ」

「うそーっ」

貴子と千秋、そして梨香も思わず声を揃えて叫んだ。

なんとまあ。幽霊かと思ったら、杏奈の弟だなんて。(恩田陸・夜のピクニック)

## 5-5. 転成的な用法

### 5-5-1. 疑問詞述語→独立語 (感動詞)

疑問詞述語「なんだ(何だ)」は、形式的には主語となる指示詞といっしょに使われ、不可解さや疑念・疑問や驚きなど、聞き手や現実に対する話し手の感情的な態度を表す。「だ」がつかない形(「なに」)もあり、そうなれば、感動詞化がより進んでいると見ることもできるかもしれない(例39)。

38) なんだ、こりゃ。(宮部みゆき・さよなら、キリハラさん)

39) 「それ大騒ぎにならなかったの？」東堂も反応に困っている。

「まあ、それなりに、だったよな」

「それなりに、って、なにそれ。何、その学校。現代の日本の学校なのか？」僕は言う。(伊坂幸太郎・砂漠)

「よ」のついた「何だよ」の形は、文の中でよびかけのなはたらきもしながら、聞き手の言動に対する直接的な批判を表している<sup>7</sup>。話し手は聞き手の行動に対する不満を表明し、それを変えたいと思っているのである。

40) 「俺はちょっと、ここを去りますよ。もうだいたい分かりましたからね」と言った。

「何だよ、これからだろ。見てようぜ」(伊坂幸太郎・砂漠)

41) だいたい何よ、輪ゴムを使え、火で焙れって、あんたのとこの責任なのに、なんで私がそんなことまでしなくちゃならないの。(荻原浩・神様からひと言)

発見や気づきなど、話し手による新たな認識、そして、それが予想とくいちがうことによる期待はずれや失望を表すものもある。

<sup>7</sup> 次の例も話し手の批判という感情的な態度を表しているが、聞き手に対する批判ではない。

おい、なんだ、あの若造は。(荻原浩・神様からひと言)

また、「のだ」のついた「なんなんだ」の形は、話し手のとまどい、おびえ、恐怖などを表す。

「なんなんだよ、おまえ」と、高校生の一人がおびえたように言った。(三浦しおん・風が強く吹いている)

42) 「なんだ、もう飽きちゃったのか？」

「だってさあ、なーんにもないだもん」(重松清・ビタミンF)

43) 「別人だった。僕を襲った男は、もっと年が上だったし、肩ががっちりとしていた。明らかに、別の人だった」

「何だー」と南が落胆しつつも、怪談話が嘘だと分かったかのような安堵も浮かべた。(伊坂幸太郎・砂漠)

#### 5-5-2. 疑問詞補語→独立語(陳述詞)

疑問詞「何を」が、補語から、話し手の感情的な態度を表す独立語のようにになっているものがある。聞き手の言動に対して、話し手は、いらだちながら、しかっている。あるいは、否定して非難しているのである。この場合、「何を」とむすびつく述語動詞は、継続相非過去形をとることが多い<sup>8</sup>。これは、動作の継続を表しているように見えるものもあれば、そうでないものもあるようである。そのいずれの場合も、継続相が使われるのである。継続相の持つ眼前性という特徴が感情的な意味という表現性とむすびついているのかもしれない。また、述語動詞は「のか」という形をとる。

しかし、次にあげるものは、まだ、「何を」が述語動詞とのむすびつきにおいて、もとの補語としての働きをしているとも言える。だが、文の意味としては、「何を」の部分聞き手にたずねているわけではないので、文の機能的なタイプとしては、疑問文から、聞き手をしかる文などへ移行していると言えるだろう。

44) 「あれ？お父さん、動かなくなっちゃったよ、これ」

「なにやっぺんだよ、ちょっと貸してみろ」(重松清・ビタミンF)<sup>9</sup>

45) そこでいきり立って、「何を言ってるんですか」と声を上げたのが、西嶋だった。「そうやって、賢いフリをして、何が楽しいんですか。(伊坂幸太郎・砂漠)

46) だ、だめですよ。何考えてるんですか。それじゃ横領じゃないですか。(萩原浩・神様からひと言)

47) 「鴛尾さん、何を笑っているんですか」と麻生氏が声を荒らげる。(伊坂幸太郎・砂漠)

しかし、次のような、別のを格の名詞をとる文になると、「何を」は、完全に独立語となっており(天野(2008)参照)、疑問詞から、批判や非難を表す陳述詞に移行していると言えるだろう<sup>10</sup>。別のを格の名詞の補語には、評価的な意味を含む規定語がついている。また、本来は、を格の名詞と

<sup>8</sup> 完成相非過去形の例もある。

痛いわね。なにすんのよ！(宮部みゆき・さよなら、キリハラさん)

<sup>9</sup> 次の例は、この用法と違い、「5-6. 疑問詞疑問文の特殊用法」に入るものである。

そろそろ八時になる。

「なにやっぺんだ、あいつ……」(重松清・ビタミンF)

<sup>10</sup> 「何を突然」「何を(また)好きこのんで」などのように、それ自体で、驚きなどの話し手の感情を表す一つの言いまわしになっているものもある。

むすびつかない自動詞につくものもある(例 50.51)<sup>11</sup>。

48) そこですぐに、何を訳の分からないことを言ってるの、と言い出さないところが鳩麦さんの長所だ。(伊坂幸太郎・砂漠)

49) 「なに甘いこと言ってるんだ、二浪目からはもうお父さん面倒見ないぞ」(重松清・ビタミンF)

50) おい、藍子、何黙ってるんだよ。おまえだって、賭けボウリング好きだろ。(伊坂幸太郎・砂漠)

51) 貴子が、そう言われて慌てるのが分かった。明らかに、おろおろしている。

何を慌てるんだ、こいつ？(恩田陸・夜のピクニック)

### 5-5-3. 疑問詞主語→独立語(陳述詞)

次にあげる例では、疑問詞「何が」が、話し手の聞いた発話の引用の前に置かれ、それに対する批判的な感情的な態度を表している。かなり強い否定、非難である。これも疑問詞から派生した陳述詞と言えらるだろう。

例 54 のように、「何が」のあとに続くのが引用でない場合もあるが、これは、次にあげるものと同様に、あとに述べる「5-6. 疑問詞疑問文の特殊用法」(とくに「5-6-3. 疑問詞述語」)との中間的なものとも見ることが出来る。判断の対象となるものをさしだす中止形の従属節をともなっているのが特徴である。

52) しかもこの手紙の後半分は、自己弁護と保身のために言い訳の羅列になっている。なにが、[どうか理解してほしい]だ。(宮部みゆき・勝ち逃げ)

53) 「あなたも写真見てみれば？顔がわかるだけでも安心するでしょ」とも陽子は言う。なにが安心だ、と孝夫は取り合わない。(重松清・ビタミンF)

54) 「よし、行くか。女の子と親交を深めないで、何が、大学生だよ」(伊坂幸太郎・砂漠)

次にあげる「どこが」は、述語のさしだす特性の所在についての疑問が、その存在の強い否定につながっている。この強い否定は、聞き手などに対する反論であり、話し手の強い感情をともなっている。「どこが」の前に「これの」がつくことがある(例 56)。

しかし、これは、上に述べたように、「5-6. 疑問詞疑問文の特殊用法」との中間的なものであろうか<sup>12</sup>。

<sup>11</sup> 例 47 も、それに近いものである。

<sup>12</sup> これに似た「何が」の例としては、次のようなものがある。

自分のきょうだいに会いに行ったら何が悪いのよ。(恩田陸・夜のピクニック)

入ったばかりの新入生を苦しめて何が楽しいのか、と疑問はあるが、ようするに、「大学入ったからって、気を抜けると思うなよ」という大学側の配慮かららしい。(伊坂幸太郎・砂漠)

55) それとなに、塩分ひかえめなんて書いてあるくせに塩が3.5グラムも入ってるじゃない。どこがあっさりなのよ、3.5グラムも塩を入れて。(荻原浩・神様からひと言)

56) 俺の人生はこれなんだと認めて、これでいいじゃないかとうなずいて、これのどこが悪いんだよと開き直って、そうだ、中年のオジサンというのはずうずうしいものだとか昔から相場が決まっているのだから……。 (重松清・ビタミンF)

#### 5-5-4. 疑問詞(とりたて)→後置的な陳述詞

次の例は、名詞や動詞にとりたて助辞「も」のついた形のあとに「何も」がついた形で、文をいさし<sup>13</sup>、聞き手の発話の一部を引用して名詞にさしだしながら、「そんなに大きなことではない」「根本的に違う」「的外れだ」といった否定的な態度を感情的な意味とともに表している。そして、聞き手の見方・認識を修正しようとしているのである。

57) 「若干の危惧を抱いている」

のけぞってしまう。「いや、危惧も何も」僕は言葉を選ぶ。「西嶋にそういう心配は不要だと思うけれど」(伊坂幸太郎・砂漠)

58) 「で、どうするの」

「どうするも何も」僕はすでに、呆気ないほどに、この件への情熱や関心を失っていた。どうでもいいよ、と答えたかったけれどかわりに、「西嶋には伝えた？」と訊ねた。(伊坂幸太郎・砂漠)

#### 5-5-5. 指示詞主語→独立語(感動詞、陳述詞)

指示詞のとりたての形が感動詞や陳述詞のように使われているものもある。これは指示詞派生の感動詞や陳述詞と言えらう<sup>14</sup>。たとえば、「それはそれは」「これはこれは」など、指示詞のくりかえし(重複)は、聞き手に対するありがたさの感情を、直接的な感謝の表現でなく、あいまいな間接的な表現で表わしている。また、「それはもう」「これはまた」など、「もう」「また」とくみあわさった形は感情的な強調を表している。

59) 「それはそれは。ごひいきにありがとうございました」イワさんは丸い頭をさげた。(宮部みゆき・淋しい狩人)

<sup>13</sup> 次の例は、「何も」のあとに「ない」が続いている。これが、この用法の出発点的な形なのだろう。

「けどさ、俺たちは十人しかいないんだから、関係ないじゃないか。駆け引きもなにもないだろ」(三浦しおん・風が強く吹いている)

<sup>14</sup> 「この馬鹿たれが」「この薄汚ねえ泥棒野郎が」「この野郎」「この褒切り女」「このとうへんばく」「この恩知らず」のように、強い感情・評価的な意味を持つ名詞に「この」がついて、一語文をなし、よびかけを表す独立語として、のしりなど、聞き手に対する強い感情を表すことがある。名詞は、が格の形と、助辞のつかない形(はだか格)とがある。これを、指示詞としての機能を失っていると見ることができるなら、指示詞から指示詞派生の従属的な陳述詞に移行したものと言えらうか。

60) タイ焼きでハッピーバースデーとは、これまた安上がりな話である。(宮部みゆき・淋しい狩人)

## 5-6. 疑問詞疑問文の特殊用法

### 5-6-1. 疑問詞規定語

「どういう」をともなう文は、話し手の感じている不可解さを表す。出来事に対する批判的な態度を、それが起こってくる理由や原因などに対する疑念・疑問の形で表わしているのである。これは、「どういう」自体の特殊な用法とは言えないが、文の機能においては、疑問文ではなくなっている。

61) 「『自分で戦ったほうが、裁判よりも、手っ取り早いと思ったんです』って反省してたんですよ」

鳩麦さんはそこで噴き出した。「それ、どういう理屈なの」

「手っ取り早い、とかそういう問題じゃないのに」と僕も呆れた。(伊坂幸太郎・砂漠)

### 5-6-2. 疑問詞状況語

「なんで」「どうして」などの理由をたずねる疑問詞も不可解さや不平・不満などの感情的な意味を表すことがある<sup>15</sup>。この種の文は、聞き手にたずねるといふより、その出来事の実現が理解できない、納得できないという、話し手の不可解さを表しており(例62)、それが聞き手に関わることであると、聞き手に対する批判となることもある(例63)。

また、これも、疑問文の構文論的な構造は変わっていないため、「なんで」などが別の品詞に変わったというより、文のレベルでの、疑問文の特殊な用法と見ることができる。しかし、「なんでまた」のような、くみあわせ的なもの場合は、陳述詞に移行していると言えるかもしれない。

62) そんなご夫婦の子供が、なんでまた公立の小学校へなんか通ってるんです？(宮部みゆき・淋しい狩人)

63) 頭にかっとな血がのぼって、あとはひと息にまくしたてた。

「情けないと思わないか、子分みたいに使いっ走りやらされて。そいつらと遊びたかったのか？ 違うだろ？ おまえ、行きたくなかったんだろ。ほんとは、なんで断らないんだよ、用事があるからとか晩飯までに帰らなきゃいけないんだとか、いくらでも理由はあるじゃないか」(重松清・ビタミンF)

<sup>15</sup> 話し手の後悔を表す例もある。

うん。『しまった、タイミング外した』だよ。なんでこの本をもっと昔、小学校の時に読んでおかなかったんだろうって、ものすごく後悔した。(恩田陸・夜のピクニック)

## 5-6-3. 疑問詞述語

「～してどうするのか」という形は、聞き手に対する話し手の批判的な態度を表す。話し手は、文にさしだされる出来事を、まったくおかしい、ありえないことと見ているのである。この強い批判的な態度には強い感情がともなっている。聞き手が話し手の動作について抱いている疑いへの反論となっているものもある(例65)。

64) 何だよそれ、バイトに行つて金を失つてどうするんだ。(伊坂幸太郎・砂漠)

65) 「本当に鳥井君が、麻雀やってもいい、って言ったの？」エントランスを入つた後で、南が言う。目は真剣だった。

「言つたに決まつてるじゃないですか。嘘ついてどうするんですか」(伊坂幸太郎・砂漠)

「～したらどうするのか」という形は、聞き手に対して、かなり強い調子で、危ないことなどについて「注意する」「批判する」「その責任を責める」といったことを表す。その強い調子に感情的な色づけがともなうのである。また、「～したらどうしよう」という形は、動詞のさししめす動作の実現に対する話し手の不安を表している。

66) 木の根っこがあちこちにあるし、捻挫したらどうすんですか。(三浦しおん・風が強く吹いている)

67) 「これだけやったのに、当日うまくいなくて、すべてが無駄に終わってしまったらどうしよう」というプレッシャーのせいだ。(三浦しおん・風が強く吹いている)

名詞の前に「この」のつく、「～は」「～ときたら」「～といたら」などのとりたての形を受けて「どうだ(どうだろう)」で終止する文は、とりたてられたものについて程度を強調している。そして、そこに感情的な色づけが生じているのである。

68) ところが実際に走ると、このつらさはどうだろう。(三浦しおん・風が強く吹いている)

## 5-7. 副助辞的なもの

「など+と」から変化してできたと考えられる「なんて」は、動詞や名詞のあとに接続して<sup>16</sup>、それを文の主題としてとりたて、それに対する話し手の感情的な態度を表している<sup>17</sup>。この場合の感

<sup>16</sup> 例70は名詞補語への接続だが、次の例は名詞述語に接続している。

若い女の子と相乗りだなんて、とんでもない。(宮部みゆき・決して見えない)

<sup>17</sup> これには、少し用法が異なるが、「なんか」や「など」といった変種もある。

「柿崎さんの話じゃ、ご隠居さん、以前からお嫁さんと喧嘩するたびに、『あたしなんか川にはまって死んじまえばいいと思つてるんだらう。そうしてやるから』と言つてたそうなんですよ」(宮部みゆき・淋しい狩人) 時代小説など、読んだことがない。(宮部みゆき・淋しい狩人)

情的な意味の強さは、述語の単語の持つ感情的な意味の強さにもよる。

名詞に接続するものは否定的な評価が多く、また、動詞に接続するものには、「なんて」で文が終わる終止的な用法もある（例 71）。

69) 「学生が車に乗るなんて贅沢なんですよ、贅沢」後部座席の、真ん中に肩をすぼめて腰を下ろした西嶋が不服そうに言う。（伊坂幸太郎・砂漠）

70) 「アメリカ批判なんて、いまだき、子供だってしないぜ」（伊坂幸太郎・砂漠）

71) アメリカにいたのに、そこまで心配してくれてたなんて。

感激するのと同時に、相手が西脇融じゃなかったら、ここまでしなかつたらうな、と思ってしまったのも事実である。（恩田陸・夜のピクニック）

「とは」も、同様に、名詞や動詞を引用的にとりたてて、感情的な意味を表す。終止用法がある点も同じである（例 74）。

72) 北村を不愉快にさせるとは、大したもんですね。（伊坂幸太郎・砂漠）

73) 「いやいや、そんなことは」とイワさんが笑うと、お客さんも笑顔になって、「春の物思いとは粹ですね」などと楽しげに切り返してきた。（宮部みゆき・淋しい狩人）

74) 外に出ると、イワさんは急に疲れた。俸をひとり育てあげ、ようようお役御免と思っていたのに、孫の面倒まで、しかもこんなことまで世話してやらねばならぬとは。（宮部みゆき・淋しい狩人）

名詞や動詞に「だと」がついて、そこで文が終止し、強い感情的な意味（強い不満や怒りなど）を表すことがある。感情的な意味が強まると、最後の母音が長くのびる。

75) 「販促が名前をつけるだとおお」またも語尾が伸びる。（荻原浩・神様からひと言）

76) 新入社員？販促の中途入社だあとお。（荻原浩・神様からひと言）

77) なんだと、こら！（三浦しおん・風が強く吹いている）

名詞をとりたてて、感情的な意味を表す形としては、次のようなものもある。多くは三人称の文で、これは聞き手に対する感情ではなく、とりたてられた名詞にさしだされた人に対する話し手の感情である。

78) でも、この人ったら全然耳を貸してくれなくて。（宮部みゆき・淋しい狩人）

79) 他人様だってこんなに優しくしてくれるのに、うちの嫁ときたら……ほんとに情けない。（荻原浩・神様からひと言）

主語に「も」がつく文も感情的な意味を表すことがある。これは、「も」本来の「付加」などのとりたて的な意味を表してはいない。

80) 「ところで、おまえの夜遊びの理由だがな」

「おじいちゃんもしつこいね」(宮部みゆき・淋しい狩人)

81) 「やめとく、つてのも凄いい返事だな」僕は感心する。(伊坂幸太郎・砂漠)

## 5-8. その他の慣用的な表現

以上のようなもののほかに、以下のような、強調的な意味とともに話し手の感情的な態度を表す、さまざまな慣用的な(固定化した)表現もある。

### a) 程度の強調

「(みっともない) ったらありゃしないよ」「(呆れる) としか言いようがない」「(図々しい) にもほどがあんのよ」「(みっともなく) てしょうがない」「(迷惑) もいいところだ」「(おっかない) のなんのって」「(ある) なんてもんじゃないですよ」

### b) 全否定・強い否定

「(情緒) もへったくれもあつたものではない」「(元老院) などあつてたまるものか」「(そんなバカな) ことがあるわけないでしょ」「(考えてた) かどうか分かつたもんじゃないわ」「(自分に替わりがない) なんても思つたら大間違いだよ」

### c) 批判的な態度

「(思い切って話した) のに、そりゃないですよ」「(この大事な時期に、試験とは一ミリも関係のない書き初めをしろ) とは何事か」「いつまで (こんなことを私に言わ) せる気だね」「(俺の四カ月) はどうしてくれる」「(蓋が開かないのよ。) どうなってるの」「誰のために (闘ってる) と思ってるんですか」「いったい (清瀬は、走ること) をなんだとと思っているのだろう」「何様なんですか」「(その結果、歴史が変わつた) っつて、だからどうしたつて話ですよ」「(歴史) なんても糞喰らえです」「(この会社がどうなる) うと知つたことじゃない」「(どうしましょ) う) じゃねえよ」「(笑ってる) 場合じゃないだろう」「(こっちで暮らしてる) 私たちの身になつてちょうだいよ」「(ちょっと (速く走れる) からって、えらそうに言うな)」「(言つていいことと悪いことがあるだろ)」「(だから、(バイトもせずにどうやって買え) ばいいんだつづの)」「(気をつけれ) っつて言つただろ」

## 5-9. 文の評価的な成分

「驚いたことに」「残念ながら」など、文の評価的な成分が感情的な評価を表すことがあるが、これは、話し手の直接的な感情の表現というより、説明的なものである（工藤 1997 参照）。

82) 驚いたことに、呼び出しベルが一回鳴っただけで、先方が出た。（宮部みゆき・淋しい狩人）

## 5-10. 反語

いわゆる反語表現は、強い感情的な意味をともなう。強い否定、叱責などを表している。

83) 「この馬鹿たれが。何度言ったらわかるんだ。お客さんを指さすヤツがあるか」（宮部みゆき・淋しい狩人）

84) 「アルバイトでもなんでも、まともに働いてる奴が万引きなんかするか」（重松清・ビタミンF）

## 6. コンテキスト的な手段

以下は、文の構文論的な構造ではなく、コンテキスト（文脈）によって文の感情的な意味（色づけ）の実現がおもに規定されているものである。ただし、ほかの表現手段と同様、イントネーションやプロミネンスといった音声的な手段が加わっていることも多いので、構文論的な手段が関与しているとも言える。

### 6-1. 評価をさししめず形容詞

評価をさししめず形容詞は、感情を表すものではない。しかし、文が話し手の評価を表す場合、しばしば、その評価に感情がともなっている。とくに、対象の特徴を表さず、評価そのものをおもにさししめしている形容詞は、感情的な色づけをともなうことが多い。

こうした文は、多くの場合、主語のない文となる。したがって、文の構文論的な構造も関与していると言えるだろう。

85) 「凄いね」稔はひゅうと口笛をふいた。（宮部みゆき・淋しい狩人）

86) 「素敵だなア！」何となく感嘆してしまえる静寂であった。（林芙美子・魚の序文）

状態や特性を表す形容詞も、評価的な意味を含みながら、感情的な色づけもともなうことがある。その状態や特性の程度が「ふつう」（基準）を超えていることが、話し手の感情を引き起こしている

のだろうが、言語的な意味としての、その現れは、おもにコンテキストによって規定されている。

87) 満腹して畳にのびていた稔が、「わあ、暑いや」とうめいて窓を開けた。(宮部みゆき・淋しい狩人)

## 6-2. 命令形

命令形は、話し手が聞き手に何か要求する場合でも、ふつうは使われず、もし、使われるとしたら、乱暴な言い方だというだけでなく、怒りなどの感情的な色づけをとまなうことが多い。

88) 「ちゃんと店番をしてろ。万引きがあったら、その分の金をおまえの給料からさっぴくぞ」  
(宮部みゆき・淋しい狩人)

89) 「どういうこと？」西嶋が箸を突き出す。

「箸を向けるな、箸を」今度は鳥井が、手で払う真似をした。(伊坂幸太郎・砂漠)

## 6-3. 指示詞

「そんな」などの指示詞が感情的な色づけをとまなうこともある。話し手にとって、文のさしだす出来事の実現がありえない、信じられないということを表している。

90) 「十字路に埋めると、みんなに幸運がいくのか？」

「そんなことも知らんのか？ああ、この島では誰もやらないんだ。だけど、おれが生まれて育ったトーラスの方では、子供だって知ってることだ。(池澤夏樹・南の島のティオ)

## 6-4. 「また」

「また」は、動作のくりかえしを表すが、コンテキストによっては、感情的な色づけをとまなうことがある。

91) 「またケータイ替えたんですか？」

半ばあきれて訊くと、それを待っていたように課長は「みんなそう思うんだよなあ」と笑った。(重松清・ビタミンF)

## 6-5. 皮肉

いわゆる皮肉の表現も話し手の感情的な態度を表すものである。

92) 「秀明かな」と綾子がつぶやいた。

「タクシーでお帰りか、生意気なもんだな」と政彦は苦笑する。(重松清・ビタミンF)

93) 「善処？」本間の皮の薄いこめかみで血管が震えた。「君が善処してどうするの。君はいつから社長になったの。昨日来たばかりで、何を勘違いしてるんだね。君はただ情報を拾い上げて私に報告すればいい。その情報をどうするかは私が決める」(荻原浩・神様からひと言)

## 7. おわりに

以上、本稿に述べた言語的な事実は、感情的な意味などの用語で呼ばれながら、すでにさまざまなところで指摘されていることの不完全な寄せ集めとも言える。しかし、本稿は、それらを、感情性という機能・意味的な場としてまとめあげ、そのなかで位置づけることを目的としている。本稿は、そのように、感情的な意味を表現手段とともに全体的に明るみに出す試みであり、そして、まだそれが研究の初期の段階にあるのであれば、その体系化がきわめて不完全であるのも避けがたい。とりあげられなかったものも多く、いたるところで課題が露呈しているのだが、そうした不備は今後の研究で補っていきたいと思う。

### 〈参考文献〉

- 天野みどり (2008) 「拡張他動詞文—何を文句を言ってるの」『日本語文法 8 (1)』日本語文法学会
- 工藤浩 (1997) 「評価成分をめぐって」川端善明・仁田義雄編『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房
- 鈴木重幸 (1972) 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 須田義治 (2009) 「「ものだ」の意味記述」『ことばの科学 12』むぎ書房
- (2010) 『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 モダリティ』くろしお出版
- 宮島達夫 (1994) 『語彙論研究』むぎ書房
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』ひつじ書房